私は普通の人間だ。

不協和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は普通の人間だ。

【Ｎコード】
Ｎ４８８７Ｘ

【作者名】
不協和音

【あらすじ】
私は普通の人間だ。
たとえ幽霊が見えたとしても…

私は普通だ。

私はいたって普通の人間だ。

親兄弟は普通で、父はサラリーマン母は専業主婦、兄は私と同じ高校に通っているいたって普通の高校生だ。

私は普通だ！

たとえ幽霊が見えたとしても…

なにしろ私の成績は中の中だし、容姿だって普通、性格も多分普通だ。

幽霊が見えたり触れたり喋ったり出来る事を除けばいたって普通の女子高生なんだ。

だから私は今までこの事を隠してきた。

いまだに親にだってバレてないし、これからも隠し通すつもりだ。

つもりだったのに…

どうしてこんな事態になってしまったんだ？

2時間前

やばいよこれは…

こんな所誰かに見られたりしたらアウトだ。

（今日の晩ご飯何だったっけ？）

と、現実逃避しても仕方がない、この状況は変わらない。

早い話、今私は空を飛んでいる。

まぁ実際には飛んでいるように見えているだけだけど

今から2時間前

学校からの帰り道友人と喋りながら普通に歩いていた。

「鏡子（きょうこ）、明日休みだし遊ぼ～よ」

友人の留美（るみ）が私に言った。

「そうだよ遊ぼーよ鏡子いつも遊んでくれ　ないし～」

友人その2、香織(かおり)が拗ねたように言う。

二人が言うように私はあまり遊ばない
というか遊べないのだ。

まぁ私がこんなんだからだけどね…

「わかったわかったまたこんどね。じゃあね〜」

笑顔でその場から逃げ出した。

「「そう言っていつも遊んでくれないじゃん〜!!」」

二人は叫んだ。

今思えば素直に遊んとけば良かったと思うよ。

どうしようか…

二人と別れた後私はまっすぐ家に帰ろうとしていた。

――死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねない死ねね死ね死ね死ね――――――――

声が聞こえた。

私はその方向を見ないように近寄らないよう移動したが、声は段々と確実に近寄って来る。

―お”まえお”れ”わかるだろ―

それでも無視したこういうのは無視にかぎるから。

いつもなら諦めて消えているのに今回は違った。

――むじずるなぁぁぁぁぁぁぁぁ――

男の幽霊が叫ぶと私の身体はふわりと宙に浮いた。

それから2時間私は空を飛んでいる。

まだ、誰にも見られていないのが奇跡だ。

さて、どうしようかな…

諦め

と言ったものの今は何も出来ない状態だ。

このままだと誰かに見られるのも時間の問題だ。

離して欲しいけど今離されたら落ちて死んでしまう…

考えれば考えるほど答えが出てこない。

―おまえ” おれが見えるだろ―

男の幽霊はまた同じ事を言った。

「だから何？」

私はつい幽霊に言ってしまった。

――死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね――

幽霊はぶつぶつつぶやいた。

だから嫌なんだ、幽霊とはまともに会話さえ出来やしない…

それにもうここがどこかさえわからない。

もう誰でもいいから私を助けてくれ〜

霊

当然誰も助けに来てくれない事は分かっている。

実は幽霊に連れさらわれるのはこれが初めてじゃない…

高校生になってからは初だけど、小学生の頃は割と頻繁に連れさらわれていた。

（まさか高校生にもなってこんな事になるとは思ってなかった油断していたな…自分）

と自分に怒りを感じた。

が、もう今更後悔しても遅いまだ、誰にも見られていない事を幸運に思っておこう。

――死ね死ね死ね……――

まだ、言っている。

私ははぁ～とため息をつき周りをキョロキョロ見回した。

（え！！何あれ？）

てっきりこの男（幽霊）は私を殺すのが目的だと思っていたが、違ったみたいだ…

私達が向かっているだろう場所に黒い靄(もや)がかかっている。

例えてみるとすればブラックホールみたいな感じだ。

私はそれに見覚えがあった。

それも嫌な感じに…

声

私が４歳の時にあれと同じ物を見た記憶がある

私が４歳の時は今よりも力（幽霊を見たり触れたり）が強くなかった…

声が聞こえるだけで見たり触れたりする事さえ出来なかった。

４歳の時は、まだ幽霊と生きている人間の違いがわかっていなかった。

当時私は声に悩まされていた、お母さんやお父さん、兄が聞こえていない声が聞こえていたからだ。

両親に声の事を言うと病院に連れられ検査をさせられた。

それ以来私は両親に何も言わなくなった。

“こっちへおいで”

声がした…

「だあれ？」

”こっちへおいで”

声の方に近づいたが、誰もいない。

「どこにいるの？」

”こっちだよこっちへおいで”

声がだんだん大きくなる方に近づく。

声が一番大きくなった場所には黒い靄があった。

「なにこれ」

幼い私はそれに触ってしまった。

違う世界

それに触れた瞬間私の体はその靄に吸い込まれてしまった。

目の前は何も見えない、目を開けていても閉じていても変わらない・・・

上も下も分からない、自分の体は宙に浮いているような感覚、そんな状態が続いた。

いつ自分の足が地面についたのか、何分、何時間、宙に浮いていたのかは今はもう覚えていない。

ただ、すごく怖かった事だけははっきりと覚えている。

気づいたら私は全く知らない場所に来ていて、そこにはお母さんやお父さん知っている人は誰もいない事はなぜか分かっていた。

「ここどこ？おかあさんおとうさんおにいちゃん～」

私は居ないのが分かっていたのにそう叫んでいた。

当然だれも反応しない、たくさん泣いて叫んでも誰も来ない。

私は2時間ほど泣き叫んでいたが、疲れて寝てしまった。

どれだけ寝ていたのかは分からないが、目を覚ますと元の場所にいた。

別にそこで何かがあったではないがその後、私は幽霊を見ることや、触ること、会話ができるようになってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4887x/

私は普通の人間だ。

2011年10月22日08時05分発行